

5-3 有効性の検証

有効性の検証は以下のポイントを考慮に入れて行った。検証結果例については次項より紹介する。また今回は単年度で実施を行ったため伝承実施前後、さらに時間が経過してからの意識把握を一部の実施活動でしか行えていないが、意識の定着が図られたかどうか継続して検証を行う必要がある。

表 15 有効性検証の視点

有効性検証の視点	まとめのポイント
イベント参加の内容理解度	①災害教訓を伝承するという目的を達成したかどうか ・ イベントの参加により内容を理解し、災害教訓を伝承できているかどうか。
伝承の素材（内容）の理解度	②個々の伝承の素材（内容）の強みと弱みを確認する ・ 災害教訓をより理解してもらうために有効な手法は何か検証する。 ・ 手法の有効性の違いが生じた要因を検証する。
各手法の理解度 興味がある災害教訓伝承 あまり知らない災害教訓伝承	③個々の伝承手法の望ましい訴求対象を見極める ・ 個々の伝承手法がどのような訴求対象に有効であるのか検証する。 ・ より有効な伝承実施を行うにはどのような訴求対象にどのような手法が望ましいのか判断する。
イベントの理解度と各伝承手法の理解度の関係	④個々の伝承手法の実施内容の妥当性を確認する ・ イベントの理解度が高くなる、つまりより効果的に伝承実施を行うためには、どのような手法を用いることが有効であるか検証する。
災害教訓伝承する立場として携わりたいかどうか	⑤将来的な伝承活動の継続に向けた課題を確認する ・ 今後伝承活動を継続させていくためには、参加者に災害教訓伝承する立場として関わってもらうことも重要である。そのためにはどのような伝承実施が有効であるか検証する。

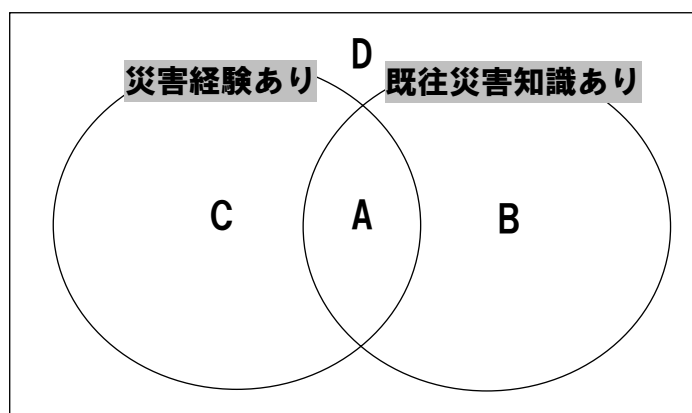
（１）参加者の防災知識・行動レベル

①参加者の防災知識・行動のレベル

伝承手法の有効性検証を行うに際し、イベント参加者の災害に対する意識・行動レベルを以下のように定義した。

【災害知識レベルの設定】

災害知識を災害経験の有無と既往災害知識の有無により以下のように区分した。「災害知識のレベル」の高低はおおむね **A>B>C>D** と判断する。



- A: 災害経験ありかつ既往災害知識あり
- B: 災害経験なしかつ既往災害知識あり
- C: 災害経験あり、既往災害知識なし
- D: 災害経験なし、既往災害知識なし

図 49 災害知識レベルの区分

※災害経験は設問 1、既往災害知識は設問 2 の回答により判断した。

【災害に対する意識レベルの設定】

上記で設定した「災害知識レベル」と防災訓練の参加頻度（問 4）のクロス集計により「災害に対する意識・行動レベル」を表 16 災害に対する意識レベルのように区分した。

災害に対する意識・行動レベルは **I 無関心→II 気づき→III 正しい理解→IV 有事の的確な判断・行動** の 4 段階で高くなるものと設定した。

表 16 災害に対する意識レベル

		災害への備え（防災訓練の参加頻度）				
		毎回参加している	時々参加している	参加したことはある	行われていることは知っている	行われていることを知らない
災害知識 (図 48)	A	IV 的確な判断・行動レベル	III 正しい理解			
	B				I 無関心レベル	
	C		II 気づきレベル			
	D					

②検証結果例

イベントごとにアンケート回答者の意識・行動レベルを分析した。以下のとおり今回の訴求対象の各層の意識・行動レベルとして妥当な区分とみることができた。

- ・災害に対する意識レベルは小学生で最も低い
- ・赤十字奉仕団大会参加者が最も高いレベルにあると判断できる。これは災害時に赤十字奉仕団として活動する役割を担っており、平常時から災害に対する意識が高いと考えられる。
- ・上伊那公民館研修会や遺構見学会参加者でも高いレベルであると判断できるが、これは公民館の館長や主事といった地域のリーダーを担うべき人や防災リーダーが参加していることが影響していると考えられる。

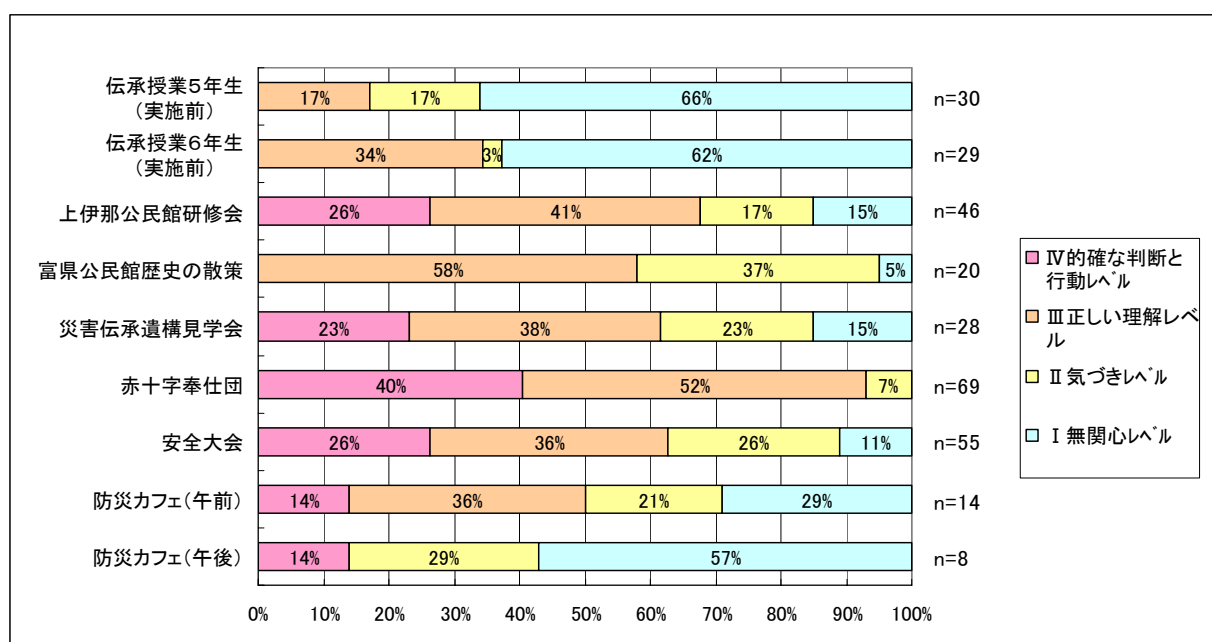


図 50 アンケート回答者の災害に対する意識レベル

(2) 災害教訓伝承の理解度について

①検証方法

災害教訓伝承による理解度はアンケート、感想文、参加者へのヒアリングにより把握を行う。アンケートではイベントに参加して理解できたかどうかを5段階評価により把握する。

②検証結果例

実践でのアンケート結果の一例を以下に示す。その他の結果は参考資料－6に掲載する。

- ・「よく理解できた」と「やや理解できた」をあわせた割合は、全てのイベントで70%以上と高くなっている。
- ・中でも伝承授業、上伊那公民館研修会、富県公民館伝承講座では100%と高い結果となった。
- ・「よく理解できた」に着目すると、伊那小学校で最も高く、3回の授業を重ねることにより、より理解度が高くなったと考えられる。

イベント名称	内容	訴求対象	伝承手法	人数	アンケート結果
災害教訓伝承授業	防災と社会をテーマにした授業	子ども	・授業 ・災害体験談 ・現地見学会	n=30	
上伊那公民館研修会	災害教訓伝承講座の研修会、現地見学会	地域リーダー	・おはなしマップ ・現地見学 ・伝承ビデオ	n=46	
富県公民館伝承講座	災害にまつわる遺構を巡る見学会	中高年層	・おはなしマップ ・現地見学会	n=20	
伝承遺構見学会	治水・洪水の遺構施設をめぐる見学会	地域リーダー	・おはなしマップ ・現地見学会	n=28	
赤十字奉仕団大会	災害教訓伝承パネル展	中高年層	・おはなしマップ ・災害教訓伝承パネル	n=69	
安全大会	災害教訓伝承パネル展	中高年層	・おはなしマップ ・災害教訓伝承パネル ・伝承ビデオ	n=55	
天竜川防災カフェ(午前)	防災イベント	中高年層	・おはなしマップ ・朗読 ・災害教訓伝承パネル	n=14	
天竜川防災カフェ(午後)		子ども・子育て世代	・おはなしマップ ・朗読 ・災害教訓伝承カルタ	n=8	

0% 20% 40% 60% 80% 100%

よく理解できた やや理解できた
 どちらでもない あまり理解できなかった
 理解できなかった

(3) 訴求対象別の望ましい伝承手法について

①検証方法

訴求対象別の望ましい伝承手法を検証するために、「興味ある災害教訓伝承」「あまり知らない災害教訓伝承」の結果とその結果を属性別（性別、年齢）に集計した結果の傾向から訴求対象別の望ましい伝承手法を検討する。

②検証結果例

実践での検証結果の一例を示す。その他の結果は参考資料－6 に掲載する。

○訴求対象別の望ましい伝承手法

各イベントの結果を合わせて（総数 300 名）、属性別の「興味ある災害教訓伝承」「あまり知らない災害教訓伝承」についての傾向を把握した。

○災害教訓伝承として有効な手法について

- ・興味ある災害教訓伝承としては、「災害に関する伝説や昔話」「災害体験談」「過去の災害」「水防技術などの知恵」などが高い結果として出ている。
- ・あまり知らない災害教訓伝承としては、「信仰や祭り」「災害に関する歌や劇」「水防技術などの知恵」となっている。
- ・「水防技術などの知恵」「災害に関する伝説や昔話」についてはあまり知らない内容ではあるが、興味があるという結果が出ており、災害教訓伝承の内容として必要な内容であると考えられる。

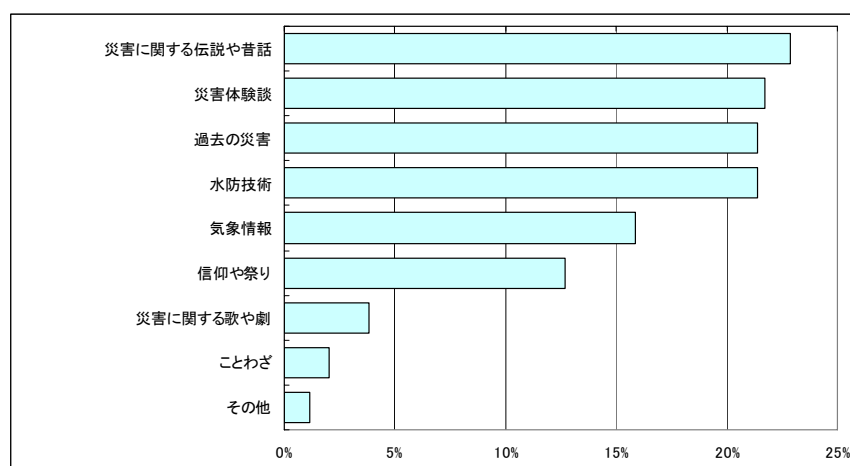


図 51 興味ある災害教訓伝承(全体)

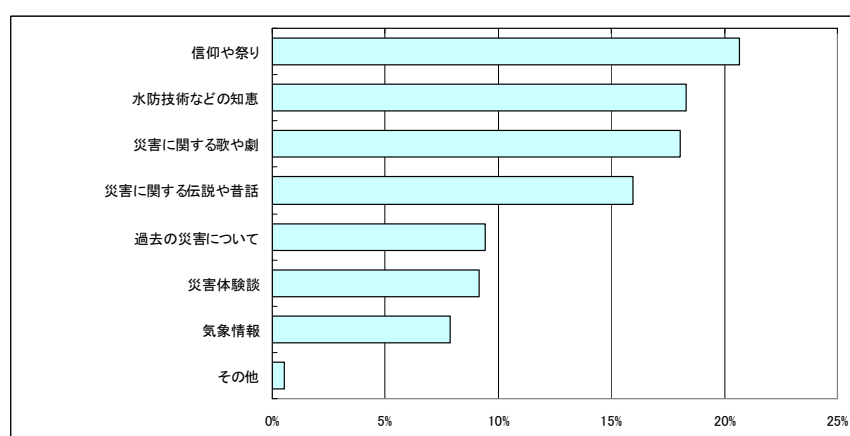
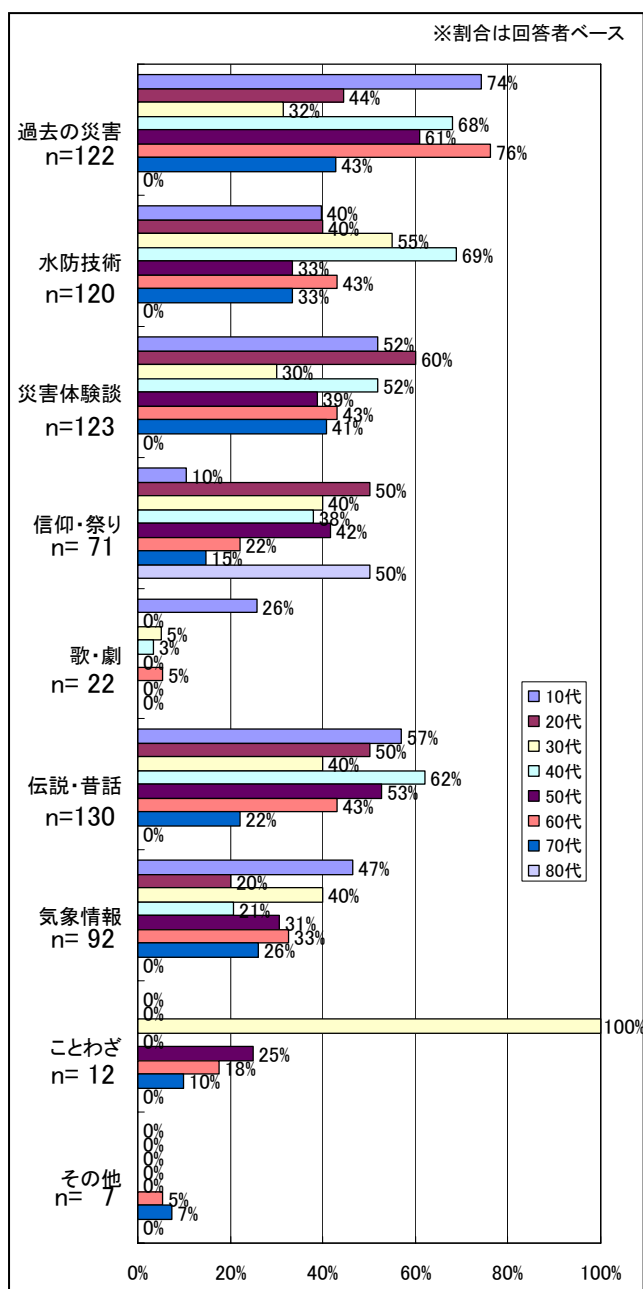


図 52 あまり知らない災害教訓伝承(全体)

○年代別でみた災害教訓伝承への関心

- ・「過去の災害」「災害体験談」「災害に関する伝説・昔話」では概ね年齢が低いほど興味があり、知らない内容という傾向がみられ、若年層への伝承内容として有効であると考えられる。これは過去の災害経験がなく、経験があったとしても記憶にない世代にとって体験談というのは災害を知るのに分かりやすい内容であるとも言える。
- ・「水防技術」については、30 代、40 代の関心が高く、これは災害時に身を守る手段など、災害時に自分や家族を守ることに興味があるためと考えられる。
- ・「信仰・祭り」に関しては、どの年代も知らない内容となっており、伝承内容としての可能性がある。



※10代には小学生の回答結果も含める

図 54 年代別の興味ある災害教訓伝承

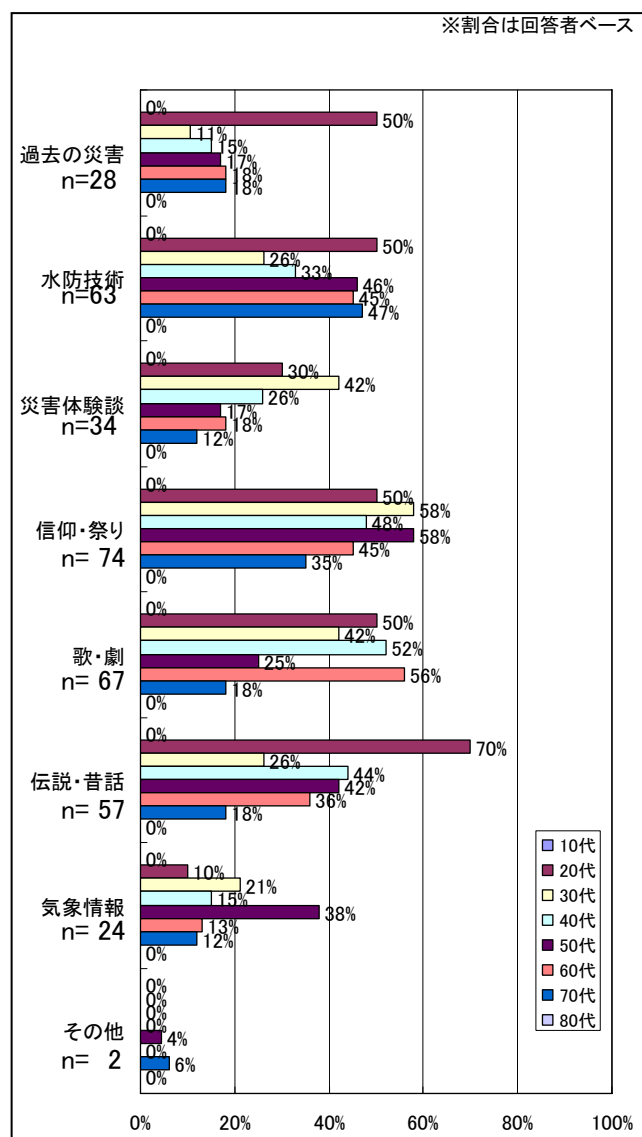


図 53 年代別のあまり知らない災害教訓伝承

（４）課題の抽出

①検証方法

今後災害教訓を他の人に伝える立場として携わってみたいかという質問を行い、その結果を属性別（性別、年齢）に集計した結果から今後災害教訓伝承者として携わる可能性がある人の傾向を見る。また災害教訓を他の人に伝える立場として携わってみたいと回答した人の興味ある伝承内容などから、今後継続した活動としていくための課題を抽出する。

②検証結果例

実践での検証結果の一例を示す。その他の結果は参考資料－６に掲載する。

○災害教訓伝承者として携わりたい割合

- ・全体の災害教訓伝承者として携わる可能性（以下、災害教訓伝承意向という）は「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせた約 7 割の人が携わりたいと考えている。
- ・イベント参加をきっかけに災害教訓伝承者となり得る可能性はあると考えられる。

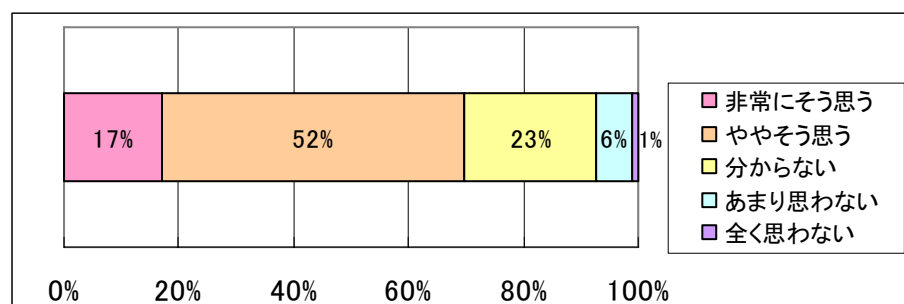


図 55 災害教訓伝承意向

○年代別の災害教訓伝承意向率（災害教訓伝承者として携わりたい割合）

- ・年代別に災害教訓伝承意向の特徴をみると、年齢が高くなるほど災害教訓伝承意向率が高くなるという傾向がみられる。

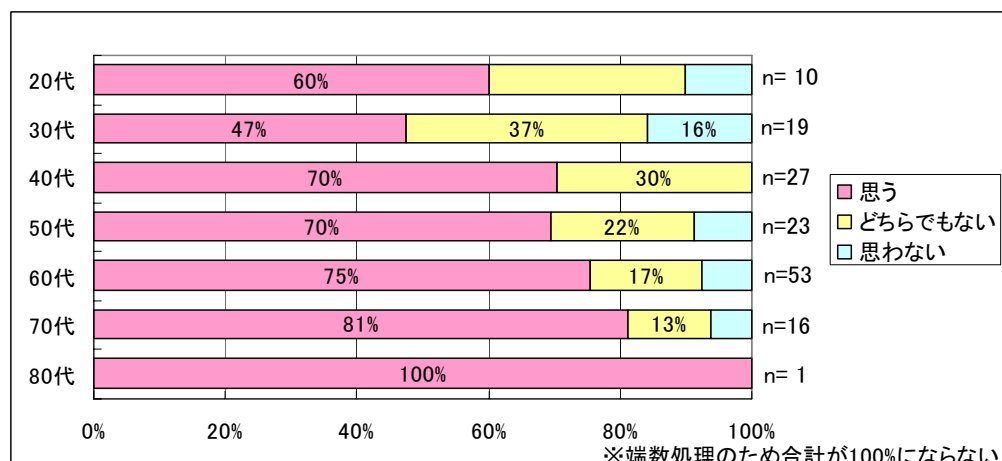


図 56 年代別の災害教訓伝承意向

○災害教訓伝承実施がもたらす効果の検証

各イベントに参加して得られた内容に対する理解度とそれぞれの災害教訓伝承意向を比較してみると、イベント内容を「よく理解できた」人の災害教訓伝承意向率は約 8 割と高い。

イベント内容の理解度が高いほど今後の災害教訓伝承につながると思われ、今回のイベントが災害教訓を伝承する場として妥当であったと考えられる。

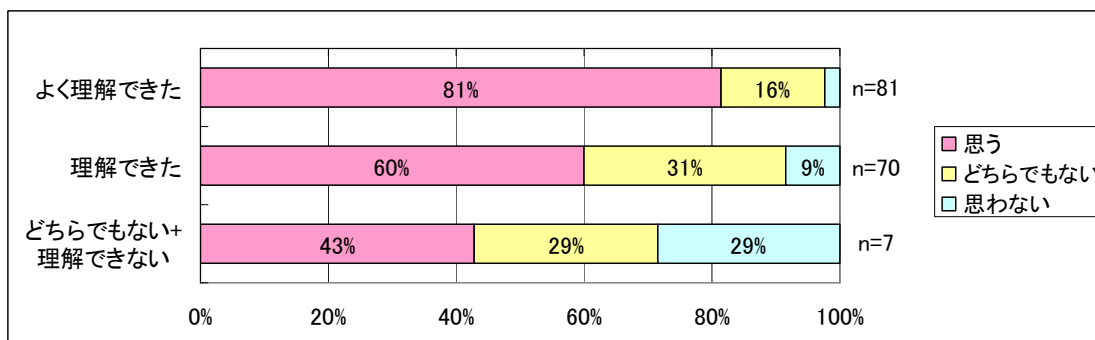


図 57 イベントの理解度と災害教訓伝承意向の関係

(5) 今後の方向性について

今回実施した有効性検証結果を基に、今後の天竜川上流域における災害教訓伝承活動の方向性をとりまとめた。

表 17 有効性検証結果

目的（まとめのポイント）	結果
①災害教訓を伝承するという目的を達成したかどうか (イベントの参加により内容を理解し、災害教訓を伝承できているかどうか)	- 全てのイベントで理解度は高く、<u>災害教訓を伝承するという目的は達成している</u>と考えられる。 - 伝承授業での理解度が高く、特に無関心レベルには1回きりのイベントより何回かの連続講座で効果が上がると考えられる。
②個々の伝承手法の強みと弱みを確認する (災害教訓をより理解してもらうために有効な手法は何か)	「過去の災害について」では聴講型などの参加者が受身になってしまう手法よりも<u>現地見学会やパネル展など能動的な動きをとまう手法が有効</u>である。 「災害体験談」については、ビデオを用いるよりも<u>実際に災害体験者の方のお話を聞くことがより有効</u>である。 「災害に関する伝説や昔話」では伝説や昔話をまとめた冊子を配布することに加え、地物の見学やお話の読み聞かせといったことを同時に行うことが有効である。 <u>おはなしマップなどの冊子は、家族や親子でのツールとしても期待ができ、冊子の配布により、さらなる掘り下げや別の対象者への広がりも期待できる。</u> 「水防技術などの知恵」や「災害に関する伝説や昔話」についてはあまり知られていないが、<u>興味がある内容で災害伝承手法として必要</u>である。 - 災害伝承授業では総合学習の活用以外に、教科学習を利用することも有効である。
③個々の伝承手法の望ましい訴求対象 (個々の伝承手法がどのような訴求対象に有効であるのか)	「過去の災害について」「災害体験談」「災害に関する伝説・昔話」は若年層への手法として有効である。 「水防技術」については、30代、40代の関心が高く、災害時に身を守る術など身近な内容を伝えることにより有効な手段である。 「信仰・祭り」に関しては、どの年代も知らない内容となっており、伝承手法としての可能性がある。
④個々の伝承手法の実施内容の妥当性 (より効果的に伝承実施を行うためには、どのような手法を用いることが有効であるか)	- イベント参加による内容理解度、各伝承手法の理解度ともに高い結果となっており、個々の伝承手法の実施内容は妥当であったと考えられる。 <u>より有効なイベントとするには関係機関との連携を強くして、密な連絡を取ったり、呼びかけの方法を工夫するなどの必要がある。</u> <u>伝承授業では特に高い理解度につながっており、今後他学年や他校に広めていくことが有効</u>であると考えられる。
⑤将来的な伝承活動の継続に向けた課題を確認する (伝承活動を継続させていくために、参加者に災害教訓伝承する立場として関わってもらうにはどのような伝承実施が有効であるか検証する。)	- イベント参加をきっかけに災害伝承者となり得る可能性はあると考えられ、<u>イベント参加後に継続的に伝承プログラムに関われるような仕組みづくりが重要</u>である。 - 年代別に災害伝承意向の特徴をみると、年齢が高くなるほど災害伝承意向率が高くなるという傾向がみられ、<u>高齢者層にどのように伝承実施を行い、伝承者として関わるような内容とするのか</u>ということが重要である。

以上の結果より今後の展開について以下にまとめる。

- ・ 今後の量的展開としては、公民館の伝承講座のように、管内の市町村への展開を定着させるための試みが考えられる。具体的には、「伝承内容の解説」「現場見学会」などイベントの開催が考えられ、それらの試みを支えるために「災害伝承の仕組み作り」を行っていく必要がある。
- ・ 伝承の質的展開としては、伝承の情報をまとめたデータベースや、伝承素材として価値のあるデータ・記録を継続的に整理するとともに、新しい情報や貴重な記録を発掘し公開するなどし、質的向上を図ることが考えられる。